

7 も も

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p>	牛ふんたい肥 2～3t/10a
化学肥料 低減技術	<p>○肥効調節型肥料施用技術 被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術 有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 ・早生（無袋） 中晩生（有袋） 3.3kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	<p>○機械除草技術 除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。 ・生物農薬：ミルベメクチン乳剤（ハダニ類、モザイクダニ）など</p> <p>○光利用技術 黄色蛍光灯や光反射資材利用により害虫の活動抑止や忌避させる。</p> <p>○被覆栽培技術 被覆資材により有害動植物の付着を防止する。 ・ビニール被覆、袋かけ（黒星病、灰星病、炭そ病、シクイムシ類、カミシ類、ヤガ）、防風垣、防風ネット（せん孔細菌病の発生軽減）など</p> <p>○フェロモン剤利用技術 フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。 ・オリフルア・トートリルア・ピーチフルア・ピリマルア剤（ナシムシクイ、モハモグリガ）など</p> <p>○マルチ栽培技術 稲わら等利用により有害動植物のまん延を防止する。</p>	化学合成農薬成分回数 ・早生（無袋） 中晩生（有袋） 13成分以内
<p>その他の留意事項</p> <p>有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。</p> <p>砂壤土で、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。</p> <p>フェロモン剤を使用する場合には広範囲（5ha程度）で使用し、より、安定した防除効果が得られるようにする。</p> <p>せん定による通光、授光の改善や枯れ枝、病枝を適切に処分する。</p> <p>青色彩粘着板利用によるアザミヤカ類の発生予察に取組むと良い。</p>		